

I LOVE YOU

~ I LOVE YOU 何も知らない僕は幼すぎたのだろうか
I LOVE YOU その言葉だけが僕の愛の全てだった
悲しく過ぎていく時間の中で僕は夢を見、そして愛を求めた
幸せに形が無いから僕はいつでも不安の中に居た
．．． 真実の愛．．． 僕は見つける事が出来たのだろうか？
偽りで塗り固められた現実の中で僕は辿り着けたのだろうか？
僕はここに居る 例えこの現実の冷たい風が僕を包み込んでも
僕は確かにここに居る
何故なら僕は都会の片隅に咲く小さな花なんだ
だってそれが僕がこの世の中に存在する確かな証なのだから．．． ~

～プロローグ～

「コ・ヒ・豆か？」そして俺は「こっちさ」「疎いさ」いやおまえは、「イラクさ」テレビの中では訳の分からない言葉が処所に飛び交っていた。そしてそのテレビの上には、彼女宛に書いたファンレターという名のラブレターが置いてあった。

僕が彼女に初めて出逢ったのはブラウン管越しだった。

テレビを付ければ彼女はいつも僕のそばに居てくれた。僕が仕事で疲れて帰って来た時も、そして僕が涙でぼやけたブラウン管を覗いている時も、彼女はいつもと変わり無い笑顔で僕のそばに居てくれた。それは手を伸ばせば今にも手が届きそうなのにそれは限りなく近く、そしてそれは果てしなく遠い距離だった。

きっと今僕が彼女に触れる事が出来ないという事は、多分スタジオの前で彼女が出て来るのを一晩中待ち続けたとしても同じ事だろう。なのになぜ僕はあの時、彼女に恋なんかしてしまったんだ。恋なんかしなければこんなに切なくてやり場のない気持ちになんかならなかったはずなのに・・・。

僕は苦しくて苦しくて友達にも相談したよ。だけど答えは「誰だってそんな時期があるもんさ」「そりゃ恋じゃなくて、ただの憧れだよ」って。

本当にそれだけの事なんだろうか？ この純粋に彼女を愛しているという事が、そしてこの傷付く心は本当に、本当にそれだけの事なのか？

僕は暗い部屋の中、彼女の優しさに触れようと手を伸ばして見た。そしてブラウン管に僕の冷たい指が触れた瞬間、たまっていた静電気がパチンと音を立てて、僕の冷たい身を伝わって心の中に激痛を走らした。

・・・「ハジメカラワカッテイタノニ、ハジメカラ・・・」・・・

僕はただ彼女の優しさに触れたかっただけなんだ。そして彼女の為に何かしてあげたかっただけなんだ。ただそれだけで良かったんだ。

彼女がドラマの中で幸せを掴もうと頑張っている時は、僕は心から応援した。そして彼女を傷付けようとする奴がいる時は、そいつに対して本気で怒（いか）った。そして彼女が悲しい想いをしている時は、僕は彼女の為に泣いた。そして彼女が寂しい想いをしている時は、ほんの少し僕はテレビにいつもより近付いて寄り添ってあげた。そして彼女が寒い想いをしている時は、僕は自分が着ていた上着をテレビの上から掛けてあげた。きっとこんな馬鹿げた僕を彼女が見たらなんて思うだろう。多分嫌で嫌でしょうが無いだろう。本当に嫌で 嫌で 嫌で 嫌で 嫌で 嫌で・・・

ああ神様教えて下さい。僕のこの恋焦がれる気持ちはいけない事ですか？ それとも僕の愛した人がたまたまブラウン管の中に居ただけですか？ 僕の求めるこの愛と、あなたが求めるその愛は違うんですか？ どちらにしろその答えを僕はどうやって捜せばいいのですか？ 運命の悪戯（いたづら）だと思えば、僕は救われると言うのですか？ それとも・・・

そしてこんな僕の心の中には、彼女の優しさに触れようとした時のパチンという静電気の音と、激痛がいつまでもいつまでも悲しく鳴り響いていた。

～僕は泣いている少女の夢を見た。

夢の中の少女はとても小さく、それは触れてしまえば今にも壊れてしまいそうな程繊細で弱いものだった。そして僕はそんな彼女の横に並んで座った。

僕らはその間一言も喋らなかった。ただ僕は彼女の隣に座って僕の肩をほんの少し貸してあげただけだった。

ただそれだけの僕は少女の夢を見た。～

第 一 章

『愛の始まり』

「今日はこれであがらして下さい」と僕は時計の針が8時を指したのを確認してから社長に言った。

すると社長は「なんだもうあがっちゃうのか」とワープロを打っていた手を休めて言い返して来た。

「ええ今日は用事があるんで」と僕が言うと「ああそうか今日は、これの日か？」と社長が小指を立ててちょっといやみっぽく言ったので、僕は「ええまあそんなところです」と言いながら帰り支度を始めた。そして帰り支度が終わると僕は軽く会釈をしながら「それじゃ御先に失礼します」と言い、それからタイムカードを機械に差し込んだ。

機械はガチャガチャと今にも壊れそうな音を出してタイムカードに退社時間を刻んだ。そして僕のタイムカードには、毎週金曜日だけが8時退社と刻まれていた。

だいたい普段は9時、遅ければ10時か11時頃まで仕事をしていたが、毎週金曜日だけは何が何でも8時迄にはあがるようにしていた。さっき社長にも言われたけれど、会社の仲間も僕が女の子とデートをしていると思っているんだ。実際僕のシステム手帳にも、22時Dateと書き込んであったからそう思われても仕方無い事だろう。僕もそれに対して何故か嫌な気持ちにはならなかったし、その事もまんざら嘘とも言えなかったからだ。でも実際はデートなんかでも、人と逢う事なんかでも無かった。ただ僕には毎週金曜日に気になるドラマがあっただけの事だった。正確に言うと、気になる女の子が出ているドラマがあったんだ。そして僕はその女の子が出ているドラマを見る為だけに、毎週金曜日は早目に上がるようにしていた。そしてその日は僕にとって唯一その女の子とDateをしている気分になれる日でもあった。

その女の子に出会う前の僕の金曜日の過ごし方と言うと、だいたい9時に退社をしてから夜の街に繰り出すか、と言っても僕は全くと言っていいくらいアルコールが駄目な人なので、居酒屋、パブ、スナックと言うアルコールがらみの所には行けなかった。だから必然的に結局何処かで御飯を食べてからカラオケ屋にたどり着くパターンが多かった。本当はアルコールさえいける口だったらもっとバリエーションが広がっているのだけど、これだけはしょうがない。体質の問題なんだろう。だけど幸いな事に、よく僕と一緒に夜の街に繰り出す友達の博之と言う男も僕に劣らずアルコールが駄目な男だったので、夜の街では二人は最高に気が合った。そしてこの博之と言う男は僕が高校に入って最初に口を聞いた奴だった。

こんな事僕が言うのも変な話だけれど博之はなかなかの二枚目で、女の子にも結構もて

ていた。僕も自分で言うのもおかしな話しかれど結構もてていたんだ。でも博之には負けていた。それでも二人が気が合った理由は。外見は確かに二枚目だった博之も、中身は全くの三枚目だったからだ。僕はそんな博之と夜の街でちょっと酔っぱらいを演じて千鳥足で歩いたり騒いだりするのが最高に楽しかった。

それ以外に金曜日の過ごし方は、僕の愛車のソアラで夜中のドライブをするのが好きだった。真っ白なソアラをピッカピッカに磨いて夜の湾岸を走るんだ。勿論バックミュージックはBEACH BOYSのナンバ - さ。ヘルプ・ミ - ・ロンダで陽気にエンジンを掛けてアクセルを踏み込むと、僕の心は踊り出す。そしてサ - フィン・U . S . A . が掛かる頃には、僕の気持ちは最高に盛り上がるんだ。それから晴海埠頭で小休憩。曲は浜辺の乙女さ、そして背中に潮風を感じながら東京の夜景を眺めてク - ルに煙草を吸うと、本当に素敵な気分になれるんだ。それから30分位して体が冷めてきたら、僕はまたホットな気持ちを求めて走り出すんだ。後半はBe a t l e sのナンバーで僕の心を踊らせる。最初はやっぱりロックン・ロ - ル・ミュージック！ ジョンのギター - とポールのシャウトが僕を陽気に酔わしてくれる。それから僕の心が加速するんだ。何処までも何処までも・ ・ ・。そして幕張辺りで湾岸とさよならをするんだ。だけど僕のドライブはまだまだ終わらない。それから千葉の県道を東へ東へとひたすら走り続ける。その頃イン・マイ・ライフが僕のカーステレオから流れてくるんだ。そして僕はちょっとシックになりながら、さらに東を目指すんだ。それから2度目のレット・イット・ビ - が流れる頃に、やっと目的地の九十九里に辿り着くんだ。

誰も居ない真夜中の九十九里が僕は好きだった。みんなは湘南の方がいいよと言う。そりゃ僕も湘南は嫌いじゃ無かった。けれど僕にとって湘南は余りに近すぎたし、煌びやか過ぎた。週末の疲れきった僕の心と体をいやすには、それは少し物足りない距離で、にぎやか過ぎたんだ。だから僕はつついそよ風の誘惑に負けて、気が付くと九十九里まで来てしまっていた。そしてこの真夜中の九十九里には実は僕だけの小さなロマンが幾つもあったんだ。

まず第一のロマンはこの九十九里は太平洋に直接面しているという事。それがどういう意味かと言うと。太平洋に面していると言う事は、その先にはマリアナ諸島、ミッドウェー諸島、ハワイ島、クリスマス島、そしてもっと先にはアメリカ大陸があるんだ。そりゃ現実的には見えないかもしれない。いや絶対に見えないだろう。だけど僕には見える様な気がした。そして海の向こうから吹いてくる風は、ちょっとだけアメリカの匂いがする気がしていたんだ。そして僕はそう思うだけで凄くロマンティックになれた。この気持ちはきっと湘南では味わえないだろう。房総半島と伊豆半島に囲まれているからね。でも本当は気持ちの問題だけだと思うんだけど、やっぱり九十九里の方が僕をそういう気持ちにさせてくれた。

そして第二のロマンは月だった。これは運が良くないと見えないんだけど。満月が調度海の上に来た時、一瞬、時が止まるんだ。その光景はまるで月の砂漠が何処までも何処までも続いているかの様に・ ・ ・。

よく昔の人は月には神秘的な力があつたと言っていたと言う。実は僕もそう思うだ。何故なら月を見ていると何故か不思議な気持ちになれるからなんだ。きっと僕が自分自身を星で例えるとすればきっと月なんだろうと思うんだ。何故なら僕の性格がギリシャ神話に出てくる月の女神アルテミスに僕は本当によく似ているから。僕は悪い者に対してはとことん冷酷にもなれる。けれどその反面、正しき者にはとても暖かく、そしてとても優しくなれるんだ。だから僕が嫌な奴に見えたり恐く見える奴は、だいたい悪い事している奴なのだろう。少なくとも僕にはそう写っているんだね。けれどきっと本当は僕だけじゃなく人は誰もアルテミスでありながらそれでいて、良い事をし、そして悪い事もしてしまうんだ。それはこの僕とて同じ事。誰も正しい心を持っているのにもかかわらず、悪を許してしまうんだ。僕はそう言う風にはならないように生きてきたつもりだったけど。今まで何人もの人を傷付けて来たと言う事は、きっと僕もやっぱり弱い人間の一人だと言う事の何者でもないという事だろう。だから僕はここでこうして月を見ている事でなんだか、自分の犯した過ちが少しずつ消えていく様な、そんな不思議な気持ちになれたんだ。

それから第三のロマンは、これは相当運が良くないと見えないんだけど。ほらあの赤潮の原因になると言われている夜行虫さ。あいつが海に大量に発生すると、もうなんとも言えない光景が目の前に現れるんだ。そうだな例えるなら夜空の星が全て海に吸い込まれてしまったんじゃないかと言うか、もしくは海全体が自ら光を発しているんじゃないかと思うぐらい、とにかく物凄い光の輝きがとても優しく僕の事を包んでくれるんだ。そうすると僕は仕事場での疲れや嫌な事や悩み事や、そう時が流れている事すら忘れてしまえるんだ。そして時の流れを感じなくなった僕はいろんな事を思い出したり想像したり、風の歌を聞いたり海と話しをしたり、とにかくいろんな事が出来た。

あっそうだ、そうそう君は海と会話をする方法を知っているかい？ そんなに難しい事じゃなくて、もっと簡単な事なんだ。いいかい？ まず自分の履いている靴を脱ぎ捨ててはだしになるんだ。それからズボンの裾を膝まで託し上げればそれで準備はオッケイ。後は自分の足跡を砂浜に残しながら波打ち際を行ったり来たり、そうしている間に自然と海が話しかけてくれるんだ。

「キミハ、ドコカラキタンダイ？」

「横浜から来たんだ」

「ソウカ、ヨコハマカ。トコロデ、ヨコハマノウミハキレイカ？」

「あまり綺麗じゃない」

「ソッカキレイジャナイカ」

「しょうがないんだ。どうしても人が多いからね」

こんな風にして話が始まるんだ。そして僕はこの九十九里の海の事を[シーさん]と呼んでいた。僕はこのシーさんとは本当にいろんな話をした。この辺の海は夏になると沢山の人達が海水浴に来る話や、月と潮の満ち引きの関係だとか、海流の話だとか。時には世界情勢の様な堅い話もした。勿論個人的な話もしたよ。僕に彼女が出来たときは一緒に喜んでくれたし、別れたときは僕の話だけを黙って聞いてくれた。僕が新しい車を買った時は一早くシ - さんに見せにきたし、相談事があればシ - さんに相談した。きっと僕にとってのシ - さんは時にはジャズバンドのバンマスの様でもあり、時にはバ - のマスタ - 的

存在でもあったのだろう。だから僕は何故か嬉しいことも悲しいこともシ - さんには素直に打ち明けられたし、話すことで気持ちも楽になれた。だから僕はいつも気が付くと九十九里まで来ていたんだろう。そして朝日が出る手前でシ - さんとはさよならするんだ。それから幾つかのロマンのお礼にゴミを3つ以上拾うのさ。ちなみに僕は偽善者じゃ無いから都会がゴミで汚れていくのに対してはどうでもいいと思っている。けれど都会の片隅にある公園や、そして自然が汚れていくのは嫌なんだ。何故か汚れていくことによって自分の居場所がだんだん無くなっていく様な気がするから。だから僕は九十九里に来た時は必ずゴミを拾って帰る事にしていた。そしてゴミを拾った後に僕はもう一度海を振り返ってみる。そうすると海はもうさっきの様な面影は無くなっていて、僕が九十九里にたどり着いた時の様に普通の海に戻っている。勿論シ - さんももういない。ただたどり着いた時と違う所は、ゴミが3つ以上無くなっていると言う事と、僕の足跡が砂浜に何処までも何処までも続いていると言う事だけだろう。それからもう一度シ - さんにさよならを言って僕は朝日を背中に受けながら帰路に着く。

これが大体僕の九十九里での幾つかの過ごし方であった。それから九十九里以外にドライブする所は山に走りに行ったり、都会を流したりとバラエティ - に富んでいた。あとそれ以外の金曜日の過ごし方は、特に金曜日に限られたと言う訳では無いが、部屋でギターを弾いたり、映画を見たり、本を読んだり、音楽を聞いたりと誰にでもやりそうな事だった。それと今はもう別れてしまったけれど、恋人だった慶子と出かけていた事ぐらいだった。これが今までの僕の金曜日のライフスタイルだった。あの子にで会うまでは。

僕は会社を出て、もう寒くなり出した街の中を家を目指して歩いていた。横浜の夜の町は、会社帰りのサラリーマンや学生らしい若者達でごったがえしていた。

どの人達もこれから何かが始まるんじゃないか、もしくはこれから何か始めて欲しい様な期待の目で、異性が通り過ぎるとその異性に目を奪われていた。そんな人達の心の隙間を狙うように、キャバレ - やヘルスマッサージの呼び子達が、鼓膜が張り避けんばかりの大声で客引きをしていた。僕はこんな大声出さなくてもきっと彼等の心の隙間には響くんじゃないかと思いながら、この前僕をソープランドに誘おうとした取引先の人を思い出していた。その人は小松さんという名の人で、僕の取引先の中ではかなり親しい方だった。そして歳が僕より10歳も離れているのにもかかわらず、何処と無く幼さが見え隠れしていて僕はわりと好きだった。そんな小松さんが「この前、安くていいソープランド見つけたから、今度どう？」と僕に聞いてきた。

それに対して僕が「興味無いんで結構ですよ」と答えると、小松さんは驚いた様になんてなると聞き帰してきた。

「なんでって普通じゃないですかそんなこと」と僕が答えると。それを聞いて小松さんはさらに驚いた様な顔をしていた。それからしばらく黙っていたが、さらにまた聞き返してきた。

「だって坂井君位の歳の人にこの事を言うと、みんな本当ですか。是非連れて行って下さいよ。って口を揃えて言うのになんで？」と不思議そうな顔をして言った。

僕は仕方なく「嫌なんですよ。自分がされて嫌な事は、しない様にしているんですよ」と答えると。小松さんは、さらに訳が分からない様な顔をしていた。そして今度は僕が彼

に「小松さんこの前女の子が生まれたって言っていましたよね。もし、もしもですけど、小松さんの奥さんや子供がそういう所で働いていたり、働くと言い出したらどう思います」と聞き返した。小松さんはやっと僕の言っていた事が少し理解出来たみたいで、軽く2回位うなずいていた。僕は本当にそう思っていたんだ。もし自分の好きな人がそんな所で働くという事を想像しただけで凄く苦しくて頭がおかしくなりそうになるんだ。そしてそれは想像だけではなく、実際僕は過去に体験していた事でもあった。

そうあれはまだ僕が高校生だった頃、ある女の子と本当に短い恋をした。

その頃の僕は、授業中は空ばかり見ていて休み時間は休み時間で、寄ってきた友達とだけバイクの話や、女の子の話や、喧嘩の話して盛り上がるタイプで。それでいて彼女は彼女で、授業中はほとんど寝ていて、休み時間は一人でギターマガジンを読んでいると言うお互い近寄りにくいタイプ同志だった。そんな僕等がなぜ恋に落ちたのかと言うと。それは僕が席替えのくじ引きで廊下側の一番前の席を引いてしまった時の事だった。実は僕はこの席が一番嫌いだったんだ。理由はいたって簡単な事だ、外は見えないし廊下側からは冷たい風が吹き込んで来るので、いい事なんて一つもなかったから。だけど実は移って見て一つだけいい事があった。それは僕の後ろに彼女が居たと言う事だ。そしてその彼女が僕に突然話し掛けてきたんだ。「よろしくね」って。これが彼女との初めての会話だった。それからなぜか毎日彼女が僕に話し掛けてきた。

「坂井君好きな音楽はなに？」とか「坂井君て格好いいよね。女の子にもてるでしょ」とか今日は気分がどうだこうだといろんな事を僕に話してきたんだ。中でも彼女と気が合ったのは、パンクバンドのBULE HEARTSの事や、ロックバンドROLLING STONESの事、それから自分の考え方についての事が多かった。正直言ってこの頃の僕は、周りの仲間と真面目な話を語り合うのに少しうんざりしていたんだ。確かに口では偉そうな事を言う奴は沢山いたよ。けれどそれに中身が伴っている奴は殆どいなかった。学校が嫌なら辞めればいいし、学校に自由を求めるなら学校に来て戦えばいい。なのに学校は嫌だけど辞めたくない。自由は欲しけれど戦うのは面倒臭い。だからサボる。正直言ってこう言う奴が殆どだったんだ。だから僕は何となくそう言う奴等と語り合う事に少し冷めてきていたんだろう。この頃は。けれど彼女はそういう奴等とは明らかに違った。考え方もしっかりしていたし、言う言葉にも重みがあった。時には僕よりも深い事を言うこともあり、それでいてその一つ一つは、何処かの哲学書や自叙伝から得た知識では無い事は聞いていた僕が一番わかった。要するに彼女は自分と言うものをしっかり持っていたんだ。この頃の僕が彼女と同じ位、自分と言うものを持っていたかはわからない。けれどこの時の僕らは、きっと二人の仲だけに存在した共通性を感じ合っていたんだろう。他の誰かでは感じる事が出来なかったものを。そしてそんな二人が恋に落ちたのは、二人だけで飲みに行った時のことだった。

その日彼女はいつもより暗く、何故か寂しそうにしていたので、僕の方から今日どっか行かないと誘ってみた。彼女は少し考えていたけど、結局行く事になって、それから彼女が良く行く呑み屋で待ち合わせる事にした。僕が着いた時には彼女はすでに来ていて、調度2杯目のサワーを呑んでいる所だった。彼女は僕が来た事に気付くと「アラアラ坂井君、来たのでちゅか～」と、とんでもない口調で僕に話し掛けてきた。僕は彼女に何杯呑

んだか聞くと、彼女は指をふたつ出して「まだ2杯ちか呑んでまぢえん」とまさに酔っぱらいそのもの彼女は答えたが、僕にはすぐに何かあった事が理解出来た。とりあえず僕はお酒が呑めないのウ - ロン茶を頼んで、彼女に何があったのか聞き出そうとしてみたが、周りの音楽のうるさい事と、彼女の酔いの凄さで全く聞きだせる状況では無いと思った僕は、彼女が3杯目のサワーを呑み終わるまで待って、それから彼女を静かな公園に連れ出した。

夜の公園はさっきまでの喧しい音楽とは打って変わって、とても静かな雰囲気を作り出してくれていた。僕は彼女を公園の片隅にあったベンチに座らせ、冷たい缶ジュースを2本買ってきて彼女にそれを渡した。最初彼女は黙って缶ジュースに口をやっていたが、突然その口を僕の口に当ててきた。僕はその時、彼女に何があったか全てわかった様な気がして、黙って彼女を抱き締めたが、実はこの時の僕のわかった事なんてとても些細な事だけだったんだ。それから彼女は僕に気を許したのか、瞳からこぼれ落ちる涙と同じ位喋り続けた。けれどその言葉のひとつひとつが僕の心を傷付けていった。

まず自分が最近彼氏と別れたこと。そして学校を辞めたいと思っていること。それから自分が今までしてきたことを呟く様に話した。

「私、中学2年で初めて女になって、それから立て続けに男と寝たの。売春もしたわ。自分のお父さんと同じ位のおやじや、それ以上のおやじと寝たの。そして自分の兄の友達とも。1回寝ると2~3万もらえるのよ。愛人になった時は、月20~30万はもらったわ。」

僕はそんな淡々と話す彼女の言葉を聞いているうちに頭がおかしくなりそうになった。何だか自分の描いた小さな幸せや、今まで信じてきたこと。そして自分が守ってきた大切なモノ。そんなモノすべてが余りにも脆く崩れていく気がしたんだ。僕は遠のく意識の中で彼女にもう一度だけ聞いてみた。

「まさか今でも、そんな馬鹿な事してんじゃないんだろうな？」

それは余りにも冷たいような言い方だったかもしれない。だけど僕にとっては、最後の望みでもあったんだ。けれど彼女が口にした事はそんな僕の心を裏切るように「昨日、知らないおやじと・・・」

そしてこの言葉が僕を一瞬にして後方もなく崩してしまった。

僕は正直言って今まで人に自慢出来るような事なんて無かった。それ所かきっといけないう事でも沢山してきたよ。人には言えない事も。だから僕なんて何も言う権利は無いのかもしれない、けれどそんな僕でも売春だけは嫌だったんだ。過去に僕の先輩で売春の様な事を斡旋している奴がいて、その事をどうやって知ったかはわからないけれど、僕の知り合いの女が「ねえ、坂井君の先輩、売春斡旋してんでしょ。あやし金無いから今度紹介してよ。あやしゴム付きだったら本番OKだからさ。紹介料1割出すから、ね」と僕に話し掛けてきた事があったんだ。その時僕はなぜだかわからないけれど、彼女をひっぱたいてしまった。そして大声で「もっと自分を大切にしろ。それにあんな奴、先輩でもなんでもねえ。2度と俺の前でそんな話すんじゃないねえ」って怒鳴ったんだ。僕はこの時初めて女の子に手を上げてしまった。今まで弱い者には手を上げ無い様にしてきていたし、勿論今だってそうしているけど、その時僕はその子の命が危ないと思ってしまったんだろう。助けようとしたんだよ僕なりに。それなのにその女に金魚の糞みたいに引っ付いていたふざけた

男達にその後ボコボコにされて、気が付いた時には道端で血だらけで倒れていた。悔しくて悔しくてアスファルト殴り付けたんだ。だけど良く考えた時、自分の顔から流れているものが血だけじゃ無い事が僕を唯一救ってくれたんだ。これで良かったんだ。これで一人でも救われるなら、例え誰にも理解されなくても僕は良かったと思える気がした。あの時はね。

だけど今僕の横に座っている彼女は、あの時とは違うんだ。もうすでに僕の手が届く未来形では無く、それは僕がどんなに手を伸ばしてみても、例えどんなに背伸びをしたとしても、触れる事の出来ない過去と言う空間に彼女はひとりぼっちで寂しく居たんだ。僕は待った。偽りでもいい、彼女が笑って嘘よ、嘘に決まってるじゃない、何そんな真剣な顔してって言うてくれる事を。とにかくこの場から僕と彼女を救ってくれるなら、例え偽りでもと。確かに過去は関係無い事だろう。誰しものが恋愛して行く時に過去なんか気にしていたら、きっと誰も愛せなくなっていくだろうし、自分だって少なくとも綺麗な過去なんて持っていない事も分かっている。分かっているんだ頭では。だけどなぜ過去と言う2文字が僕をこんなにも苦しめるんだ。それは耳を塞ぎたくなる様な過去だから？ それとも僕がまだまだ若過ぎるから？ いや違うんだ。本当の理由は、本当の理由は、何故僕はもっと早く彼女に逢えなかったのか。もっと早く彼女に逢って居たら、もっと早く彼女の事をほんの少しでも理解さえしてあげれば。彼女をこんなに悲しくて辛い想いにさせずに済んだらうにと言う、自分に対する愚かさがとても悔しくて悔しくて、これが僕を苦しめる本当の理由なんだ。けれどそれはある意味僕が彼女を真剣に愛していると言う証でもあったんだ。

僕は震える声で彼女に言った。

「過去なんて関係ねえよ。今まで苦しんだ分、これから幸せになればいいよ。俺が見守っていてやるからさ」

この言葉は自分に言い聞かせる様でもあった。

僕はきっとこの事をしっかり受け止めるまで凄く苦しむと思う。だけど僕は笑ってそれを選ぶんだ。何故ならこの事から逃げると言う事は、僕にとってその何倍も苦しい事だったから。

僕はその夜、彼女と寝た。勿論彼女を愛していると言う純粋な気持ちだけで。始め彼女は今まで僕が体験した事の無い様な色々な事をしてくれたが、そのひとつひとつが僕の心を鋭い刃物で突き刺す様に傷付けていた。だけどそれが僕の彼女を愛していると言う気持ちと戦い、そして混じり合っていくうちに、段々暖かくて優しいものになって行った事を僕は今でも覚えている。

そしてそれから僕らは何度かのデートと、何度かの優しさを重ね合ったが、あの時の事とは関係無い事で別れる事になった。その時僕は彼女と約束した事があったんだ。

「俺さ、今まで女を金で買った事なんて無いけど、これからも絶対ソープランド行ったり女を金で買ったりしないから、だからさ、だからお前もこれから色々辛い事沢山あるけど、どんなに辛くても、例えどんなに金が欲しくなっても、そんなんで自分をごまかすなよ」って。そしたら彼女は泣きながら「うん、もう絶対しないから、今まで本当にありがとう。私頑張るから坂井君も頑張るってね」と言って微笑んでくれた。

本当はこの事も半分位はあったんだ。僕がソープランドに行かない理由の1つには。小松さんはあれから「確かに自分の奥さんや子供にはやらせたくない」とか「向こうだって金で割きってんだし」と相変わらず自分主義のオンパレードだった。極め付けは「社会勉強だよ。社会勉強の一つだと思ってさ1回ぐらいどう？」だってさ。

僕は正直この時ふざけんなよと思った。社会勉強？ そんな事がもし社会勉強だとしたら、僕が今まで必死にやってきた事は一体何だったんだ。今まで僕を苦しめてきた大人って一体なんだったんだ。そういう奴に限って家じゃ偉そうにしている自分の娘や奥さんにはそんな事は許さんなんて言ってるくせして、外では自分の娘ぐらいの女と寝る事が正当だなんて、そんなんで家族や自分の愛すべき者を守っていけるんかよ。そんな事で本当に……。

僕は思わずそんな事を小松さんに言い掛けたけど、きっとこの人にこれ以上言っても仕方が無いかと思って「社会人として落第した時お願いしますよ」と皮肉混じりの言葉で僕はこの話を終わらせた。

僕はこんな事を思い出しながら人の欲望が乱れかう街の中を、風の様にしり抜けて地下鉄の階段を駆け下り駅へ向かった。ホームに着くと、仕事帰りのOLやサラリーマンがホームからはみ出さんばかりにごった返していた。どの人達もこれから好きな人と逢うのだろうか。なんだか1週間の疲れよりも、これからの楽しい出来事に期待しているみたいに幸せそうな顔をしていた。今現在僕には恋人と呼べる人が居なかったが、不思議と周りを見ていると、うらやましいと言うより自分も楽しい気分になれたんだ。何故かと言うと、僕だって彼女が居た時はやっぱり楽しかったから、彼等の気持ちが手に取るようにわかったからだと思う。そして僕はそんな気持ちで駅の時計を眺めて見た。

時計の針は調度8時30分を指していて、それは電車が来る3分前と言う事でもあり、そして何より僕の気になっている彼女に逢えると言う実感が湧く時でもあった。

駅のアナウンスは機械的な言い方で「間もなく電車が参ります。危ないですので白線の内側に下がってお待ち下さい」とスピーカーから流れると、今まで適当に散らばっていた人の波が、まるで小学校のとき練習した運動会の行進の様に1列になり始めるんだ。だけど僕はいつもその列にうまく入る事が出来なかった。いつも気が付くと取り残されているんだ。運動会の行進の時も、僕だけみんなと同じ事が出来なかったあの頃のように、大人になった今もそれは変わらなかった。そんな鈍臭い僕に追い討ちをかける様に電車がホームに入って来る。そして電車のドアが開くと中で缶詰め状態だった人達が、苦しさからやっと解放されたんだろう。物凄い勢いでホームに飛び出してくるんだ。僕はその人達の勢いがとても恐かった。と言うよりも群集そのものが恐かったんだとても。きっとみんなして僕の事が邪魔なんだろう。僕はただ電車に乗る為に並んでただけなのに、乗車目標と書いてあったからただそこにいただけなのに、群集の目が僕を問い積めるんだ。この前もそうだった。僕は上り口と書いてあった階段を登っていたのに、上の方から物凄い人の波が押し寄せてきたんだ。サラリーマン、学生、子供連れのおばさん、お年寄りまでいろいろな群集が僕の行く手を当り前の様にふさぐ。そして僕に平気な顔をしてぶつかって来た。僕はその度に「あっすいません」と謝っていたが、次から次へとぶつかって来る勢いに負け

で、思わず転んでしまったんだ。それなのに誰ひとり謝りはしない。しないどころか、僕が聞いた群集の声は「ボケーと歩いてんじゃねえよ」「なにこんな所ですっころんでんだよ」「まったく、邪魔よね」「ほらほら何とかちゃん足元気を付け無いと、あのお兄ちゃんみたいに転んじゃうわよ」「あはははは」「くすくすくす」という余りにも自分勝手な声だった。僕は悔しくて言ってやったよ「そんなに面白いですか。人の無様な格好が、そんなに邪魔ですか。元をただせば俺を転ばしたのは貴方達じゃないですか」ってね。そしてたらなんて言ってきたと思う？「あ～やだやだ。人に迷惑かけといて何だその態度は」だってさ。何も分かってないんだ彼等は、僕は余りにもひどいんで偉そうな事を言った奴の胸元を掴んで言ったよ「おめえ今なんて言ったんだ？ 人がおとなしくしてれば調子に乗りやがって。口で言ってわかんないなら拳で教えてやろうか」そして鋭い目付きで周りを見渡し、群集をにらみ付けた。だけどそこにあったのは、さっきまでの威勢のいい群集ではなく、怯え切った被害者の目だった。そして僕が胸元を掴んでいた男は怯えているのだろうか。僕の手先の先に震えが伝わってきたんだ。いつもそうなんだ、群集って言うのは何の罪も感じず弱い者を平気で叩くくせして。自分に火の粉が掛かりそうに成ると、自分はまるで罪の無い被害者だと言い張る。そして自分と違う事をしている者や、自分と違うと言う外見だけで悪と正義を決めるんだ。僕は確かに目付きは悪いよ、口も悪いかもしい。だけど僕は僕なりに真面目に生きているんだよ。そりゃ貴方達の様に要領良くは無いかもしい。そして考え方も違うかもしない。勿論こんなやり方だって間違ってるかもしないよ。だけど僕にはこんなやり方しか出来ないんだ。でも一つだけ分かって欲しい事がある。僕はこんな生き方しか出来ないけれど、決してみんなの事を憎んでいる訳じゃ無いんだ。本当はみんなに優しくしたいと思っているんだよ。そしてみんなと仲良くしたいと思ってるんだよ。だからそんな怯えた目で僕を見ないでくれないか。僕は悪魔じゃないんだ。僕は貴方と何一つ変わらない同じ人間なんだから。貴方と同じ・・・。

だけど気が付けば結局いつも僕が弱いものいじめをしているという形に成ってしまう。けれど本当は違うんだ。本当は弱い者の集団の目が僕を苦しめていたんだ。だから僕は恐くてその場から逃げ出すんだ。群集の目が何処までも何処までも追っかけて来て僕を叩く。そして僕は足がもつれて転んでしまうんだ。手を伸ばした事もあったよ。誰かにしがみ付きたくて。だけど僕が手にしたものは、誰かが吐き捨てた溜め息に似た優しさだった。そしてそれは僕をたまらまく孤独にさせるには充分過ぎる程の優しさでもあった。

こんな事を繰り返しているうちに段々僕は、群集恐怖症になってしまったんだろう。今では誰も責めていないのに、なんだかいつも責められているみたいで心の置場に困ってしまうんだ。こんな気持ち分かるかい？ 僕はね、ただ普通にやっているだけなのに、本当にただ普通にやっていたのに・・・。

僕は電車から吐き出される薄汚れた空気と新たに吸い込む希望とが混じった後、勇氣と優しさを抱き締めながら車内に乗り込むんだ。勇氣は文字どりの勇氣。そして優しさは気になるあの子を強く思う事で得る事が出来た。

車内はうまくすれば本を読むぐらいのスペ - ス位は作る事が出来たが、それなり混んでもいた。僕は幸いな事に身長が178cmあったので、ラッシュアワーの車内でもあまり息苦しい思いをした事は無かったが、今僕の目の前に居る小さな女の子は息苦しいのだら

う。今にも押し潰されそうに僕の胸の辺りに顔を埋めて、時々上を向いて新鮮な空気を吸い込んでいた。いつも僕は電車の中では本を読む習慣があったんだけど、今日はその子が余りにもかわいそうだったので、僕はその女の子の為に僕の本を読むスペースを与えてあげたんだ。すると彼女は長い間潜っていた人が水面から顔を出した時にやる、スーと息を吸い込むやつに似た深呼吸をして、僕の方に顔を上げてありがとうの意味が込められていたんだろう。小さくうなずいていた。それから電車が何駅か通り過ぎる間に何度か彼女と目が合ったけれど、ただそれだけで、それ以上の事は特に何もなかった。そして電車が新横浜に着くと目の前の彼女、そして車内の半分もの人が一斉にホームに飛び出した。彼女は電車を降り際何度も僕の事を見ていたが、ドアが閉まり電車が走り出すとそんな彼女も人込みの中に消えて行った。そして僕は彼女の居なくなった車内を見渡してみた。

新横浜を過ぎると車内は知れたもんさ。あんなに居た人が殆ど居なくなって空席すら出始めていた。それから終点のあざみ野に着く頃には、座っている人の数よりも空席の数の方が多くなっているんだ。大体の人は港北ニュータウンと言う新しく出来た町で降りて行ってしまって、僕等の様な田園都市線に乗り替える人は、車内の3分の1位しか居なかった。僕は地下鉄があざみ野駅に着くと、田園都市線に乗り換える為に鬼の様に長い階段を一段飛ばして駆け上って行く。地下鉄の改札を駆け抜けて、それから田園都市線の改札を跳び越えてホームまで一気に駆け上がる。そして僕がホームに着くか着かないかのタイミングで田園都市線がホームに入ってきて、僕はその電車に滑り込むんだ。

別に特にこれに乗らなきゃ間に合わないとかそういった事は無かったけれど、毎週金曜日はなんだかこの電車に乗りたかった。ただそれだけの事だった。そして駅を1つ越えて市が尾で僕は降りる。それから僕は歩いて10分という時間を掛けて家に帰るんだけど、この日はコンビニに寄って、ポテトチップとミルクティーを買って帰った。

実は僕は普段あまりテレビを見ないんだ。いつも部屋に居る時にはテレビを付けてはいるんだけど、それはただ付けているというだけのモノであって、例えるなら一人で部屋に居る時、部屋の電気を付ける照明の様なモノだった。だから今日のように見たいテレビがあるというのはどうしても構えてしまうんだ。なんだか小さなイベントみたいだね。だから僕はジュースやお菓子を、ほら映画館で映画見る時ジュースやポップコーンを買って行くみたいな、そんな気持ちで僕も買ってしまおうんだ。そしてドラマを見ながら僕はそれを食べる。そんな見方が僕流のドラマの見方だった。

僕はお菓子とジュースの入った袋を抱えて、残りの6分の距離を家に向かって歩いた。家に着くと調度時計が9時半を指すところだった。僕はとりあえずドラマが始まる迄30分あったので急いで服を着替えてから晩御飯を食べ、そして部屋にいる熱帯魚に餌を上げた。そしてそれが全て終わる頃、時計は10時を指し始めていた。僕は部屋のテレビのスイッチを入れてチャンネルを合わせて、そしてさっき買ってきたポテトチップとジュースを部屋の小さなテーブルの上に並べて、ドラマが始まるのを待った。それから僕がまばたきを10回程した頃だろうか、僕の部屋のただの照明だったテレビが画期的な色を持ち始めて僕だけの小さな映画館になったのは。そしてそのドラマは僕を少しずつブラウン管の中に引き込んでいった。

・・・ボクは天使を見たことがあるんだ。一人目の天使はバイト先の小さなコンビニにいました。二人目はボクの小さなブラウン管と言う二次元の世界にいました。ボクには何も

分かりません。ボクには何も見えません。ただそこに天使がいて、ただそこにボクがいた
ただそれだけだったのです・・・

～夢の中の少女はその処所で僕の夢の中に現れた。
僕が寂しい思いをしている時は一晩中僕に寄り添ってくれた。
僕が悲しい思いをしている時や、悔し涙を堪えている時は僕の為に泣いてくれた。
僕が失敗をして落ち込んでいる時は頑張ると励ましてくれた。
そして夢の中の少女は全てを失いかけていた僕に
人を愛する大切さを教えてくれた・・・。

第二章 『ブラウン管の中の恋』

第二章以降をご覧になるにはMembers Roomへの登録が必要です。
登録は無料ですのでこの機会に是非ご登録ください。
登録はここから
<http://www.wish-happiness.com/scripts/regist.php>